小さなコラム　その28

みちくさ いたずら こどものじかん

令和2年 8月 葉月（はづき）

新山 裕之

処暑（しょしょ）（２３日）… 暑さがようやく収まり、２学期が始まります …

処とは収まるという意味だそうです。暑さが峠を越えて、朝晩は少し涼しい風が吹く季節です。セミもミンミンゼミやアブラゼミの他にツクツクボウシも鳴き、朝晩はいろいろなコオロギたちが鳴き始めています。今年は、そんな８月のうちに２学期が始まりました。

＜綿柎開　わたのはなしべひらく　８月２３日～２７日＞

処暑の初候は「綿柎開」です。柎（はなしべ）とは花のがくのことだそうです。固いがくが割れて開いて、中から白い綿が顔を出します。ところで、毎回、季節にちなんだ内容を考えるのですが、今回は幼稚園に綿もそれに似た植物もなく、すぐに思い浮かばずに筆が止まっていました。

＜子どもは親の鏡…＞

それでも、先日、保護者の方々とお話をする中で、ようやく書きたいことが思い浮かびました。それは、お母さんは虫が苦手で怖がっていたのをご主人に諭されて、少し意識を変えて子どもの興味に付き合うようにしたことで、子どもが虫好きになったという話でした。

＜好きな方がいいでしょうが、無理は禁物です＞

もちろん、保護者の方が虫好きならば、子どもが虫と関わる機会は増えるでしょう。夏休み前には、意外と虫好きな方が多いことに喜んでいたのですが、ある保護者の方が「虫は大丈夫だけど、イモムシだけはどうしてもダメなの」とも話していました。見た目が苦手、予想できない動きをするから怖いなど、それぞれもっともな理由があり、その気持ちもよく分かります。私たちは、単純に虫好きな子を育てたいという訳ではありませんから、大人も子どもも無理はしなくて大丈夫です。

＜小さな虫も一つの命＞

私も夏休みの記録を読ませていただきました。今年は身近な自然探検をお勧めしましたが、公園や自宅でセミの羽化を見て感動した、抜け殻をたくさん見付けたという子も多くいました。中でも一番うれしかったのは、虫を採ったり飼ったりすることを通して、小さな生き物にも命があるということを、直接体験を通して自分のこととして感じ取ってくれていたことです。ここ数日の園での虫探しの場面でも、虫の扱いが丁寧で、畏敬の念をもっていることが感じられる姿がいくつもありました。

＜自ら開く力を導き出しましょう＞

柔らかく白い綿は、内側からの力によって柎を開いて姿を現します。虫や自然を好きになるかどうかは、外から強制的にできるものではありません。子どもを綿に例えれば、園が安心して自分を出せる場になり、環境を整えて自分から関わっていった（殻が開きかけた）ときに、周りの大人がそこでの出会いを心に残るものにするひと言を掛けられたらすてきですね。

プランターのアサガオは
竹の支柱にからんできれいに咲きました

年長児は絵心をくすぐられ
竹の筆で小さな画伯になっています

畑のササゲは網を伝わって伸びて
花を咲かせ小さなササゲが実りました

最初は小さなササゲがわずか数日で
こんなに太くて長い「ひもみたい！」に
（左の支柱とほぼ同じ太さです）